

## 沖縄基地戦跡めぐりに参加して

内田

6月28日～30日に生協労連企画の沖縄基地戦跡めぐりに参加してきました。  
多くの気づき、刺激を受けたこの三日間の学びについて報告をさせていただきます。

### 1. 行程

6月28日（木）～30日（土） 2泊3日

1日目 28日（木） 中部基地見学

13:30 那覇空港 出発 講師：瀬戸 隆博さん

嘉数高台（普天間基地）⇒嘉手納基地

16:30 名護市内ホテル 伊波洋一さん講演

18:30 夕食交流会

2日目 29日（金） 北部戦跡見学

8:15 ホテル 出発 講師：川満 彰さん

名護小学校⇒辺野古漁港⇒武田薬草園⇒渡野喜屋⇒東村高江⇒辺戸岬

19:10 那覇市内ホテル 到着

3日目 30日（土） 南部戦跡見学

8:20 ホテル 出発 講師：川満 彰さん

平和祈念公園⇒糸数の壕⇒ひめゆりの塔

13:30 沖縄県庁前 解散



名護小 少年護郷隊の碑  
講師の川満さん



辺野古の座り込み（7月上旬  
で3000日目到達）



9億円とも言われる辺野古  
公民館。「莫大な金が落ちて

### 2. 印象に残ったこと

この研修では多くの刺激があり、学びを深めることができました。その断片ではありますが、以下に書き連ねます。

二日目の講師、川満さんより「人の死に際、死に様が戦争の実相を伝える」という言葉が深く心に残りました。沖縄は太平洋戦争において日本国内最大規模の陸上戦が展開された場所です。そのため多くの一般市民が凄惨な戦争に直接まきこまれ、その結果、住民の集団自決、日本兵による住民虐殺も引き起こされています。

そんな状況下での少年護郷隊（14～17歳の少年兵）のひとりの死に様を教えてくださいました。

「山の中で敵から逃げる時に、体にくっった手りゅう弾（武器がないために米兵より奪ったというシロモノ）が木の枝に引っ掛かり爆死した」

美化された戦争からは決して読み取ることのできないであろう、戦争が容赦なく人の命を奪うさまや、死んでいく人の惨めさや無念が、その死に様からは立ち上がってきます。

研修中の移動はバスでしたが、一か所、降りることなくバスの中から現地を眺めるだけという場所がありました。以前は「トノキヤ」とよばれた、日本兵による住民虐殺が行われた土地です。当時の話をすることを住民が嫌がるため、バスから降りて説明をすることができないのだそうです。当時のこの土地での虐殺の詳細を聞き、耳をふさぎたくなるようなおぞましさ、悲しさから、これほどまでに人間は追いつめられるのか、これほどまでに追いつめるものが戦争なのか、と突きつけられた衝撃がありました。



トノキヤ（バスから）

講師の川満さんの話からは、毎回「〇〇村の△△さんの証言では・・・」という言葉が聞かれました。多くの住民の方に当時の話を聞いて回っているからです。戦後生まれの講師の方であるのに戦時中の様子を鮮やかに伝えられることにも納得です。その証言収集について、凄惨な体験をしている多くの方々はなかなか証言をしてくれないそうです。口に出して語ることも嫌だ、ということが多くあるそうですが、場合によっては、悲惨な行為をしてしまった人がまだ健在である、それを語ることが憚られる、ということもあるそうです。大戦中に多くの住民が生死の境をさまよったこと、戦後生き残った人も、住民間で生死を分かつ裏切りをしてしまった後悔や見捨てられた恨みを持って生き続けていること、そういったことを知り、「戦争は終わっても戦争の残した傷は未だ癒えることなく残っている」という言葉の意味がずっしりと伝わりました。

三日目に訪れた平和の礎の前で、これまた川満さんに言われた言葉が印象に残りました。

「戦争は比べるものではない。それぞれの地域でそれぞれの戦争がある。一人ひとりの死に際、死に様を知り、それぞれの戦争の実相をつかむ必要がある。死んだ人の名前、人数を知るだけではその実相を見落とすことになる。その隙間には戦争の美化、戦争責任の回避、ひいては靖国的戦争観へと進む余地が入り込んでしまう。」

沖縄の戦争だけが特別なものでは決してなく、規模の大小にかかわらず、その戦争により壊された住民のくらしや、その悲惨さを丹念に読み取り、それぞれの戦争の実相を掴んでいくこと、その取り組みが私たちに求められていることがよくわかりました。



平和の礎 奥に戦没者の名前の書いてある石碑が並び

### 3. 最後に

講師の方々より同う具体的で細かなエピソードから、わずかであるにせよ、沖縄が矛盾と危険にさらされてきた状況を学び掴むことができました。

実際に現場へ足を運ぶことで、街のすぐ横に基地がある、という現実の異様さや、米軍ヘリが間近を通過していくことの怖さを、文字通り肌で感じました。

生協の原点は「平和とよりよいくらし」であるといわれます。沖縄の街を見渡すと「平和」と「よりよいくらし」はそのままの意味で深く関連するものであることがよくわかります。

つまり、沖縄の市民の「くらし」の目の前には、それをおびやかす存在である「基地」がある、その「くらし」を「よりよい」ものにするためには「平和」な（＝基地のない）状態を築かなければいけない、ということです。

この研修を通して、生協運動にとって平和の取り組みが絶対的に必要である、ということを再確認することができました。

しかし、今回のように平和やくらしを見つめる機会はなかなか普段の業務中ではありません。だからこそ今回のような経験は、とても恵まれた貴重なものです。

聞くところによると以前はおかやまコープでも平和行進への参加などで、職員が平和の活動に触れる機会は一定確保されていたようですが、今そういった機会に恵まれていない若手職員は少なくありません。

戦争を学び、平和運動に触れるチャンスを多くの若手職員に持ってもらおうこと。それにより生協が一層の生協運動の発展へ進んでいくこと、これがこの研修を通じて持った僕の今後の展望です。

そのためにも平和学習企画を労働組合から発信してほしいですし、僕自身もそういった企画には積極的に若手の多くが関わられるように奮闘したい、と思っています。

最後に、今回のような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。この経験を糧に今後の活動に大いに励みたいと思います。